台風第7号の雲のパノラマ写真

海上気象課　金水和夫

*

* **

** (星印につながる)

1959年8月13日の午前5時に南方定点において僚船“あつみ”と交代した私達の観測船“おじか”は帰港地である東京に針路を向けた．その頃台風7号は中心示度965ミリバールで半径約100kmの暴風圏をともなって毎時35kmの速度で北緯26度，東経140度付近を北西進していた．“おじか”の船速は13ノット，このままの速度で台風が北西進を続けるならば，西に台風をやりすごしてその暴風圏に巻き込まれずに帰港出来る予定であった．ところが15時頃より台風の進路が北に傾き，21時を過ぎる頃，北緯30度線付近でほとんど北に近い進路となって北上してきた．このままでは暴風圏突入も避けられない状態に追い込まれることになる．そこで船の進路を今までの北東から反転して西に変針し，一応台風を避航する事となった．

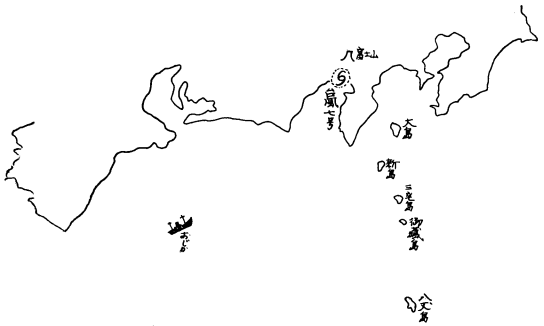
I 風速もだんだんと増加して，交代直後の時には1.2m/secであったものが，24時には東南東14.6m/secまで増大した．台風指示報によれば台風の速度も増加しつつあることがわかった．13日24時より台風近接のため帰航中であるにもかかわらず，毎時観測，毎時通報の勤務に切りかえた．明14日の夕刻までには東京港に入港出来ると思っていた観測員も，乗組員もこの台風のためには全くがっかりさせられた．一晩中はげしいしゅう雨と風浪とにもみくちやにされ，船体をふるわしながら，半速に落ちた船速で，あえぎあえぎ台風の魔手を逃れようと，西に，陸岸近くにたどり着こうとしている老朽観測船の姿が今でも思い出される．そしてその船の中で観測机にしがみつき，歯をくいしばって船の動揺から身体をささえていた自分の姿も．

その頃台風は毎時55kmという物凄いスピードで私達の後方（東側）を通り抜けて北上して行った．それは今までの常識から判断すれば，かってない程のハイスピードであった．台風からみればアッと云う間の出来事であったのかも知れない，私達から見れば長い長い時刻であっても．

台風にホンロウされて一夜が明けた翌日は全天片層雲（Fs）に覆われていた．はげしいしゅう雨も地雨と変り弱まっていたが，風は北北西となり毎秒11.7m，うねりは南東の方向から3.5mの高さで押し寄せてきていた．船の針路も又もとの北東に変え東京湾を目指していた．午前6時30分頃，だ

II んだんと片層雲（Fs）のヴェールが切れはじめ上空の雲がそのすき間から見えはじめてきた．そして寝不足の私達の目前に左舷方向から船首を廻り船尾にまで拡がって展開している昨夜の猛虎の一部がくっきりとその雄大な雲堤を真夏の朝の逆光に浮び上がらせているのを発見した．その瞬間私達は昨夜の豪雨も，怒濤も，そして疲労も，すべてを忘れ去って大自然そのもののすばらしさを満喫した．その規模の雄大さ，その形，その色彩，ただ呆然と見とれているだけで，どう表現すれば実感となって書き表わせるのか私には見当もつかない．すばやく山形技官がシャッターを切ったのを一枚一枚後でつなぎ合せて見たのがこの写真である．ただ残念ながら天頂の部分が切れてしまって入っていないので，横の拡がりだけにとどまった．台風などの大規模な雲の分布状態など海上から，それも側面から写真などで再現しようと思うのが無理なのだから仕方がない．それでもこの台風は比較的小

III 型なのでカメラにおさめることが出来たのは何よりも幸いであった．台風の位置は沼津西方にあり駿河湾から上陸寸前，私達の観測船は北緯33度35分，東経137度6分の位置にあり，台風南西（220°）後面約240kmくらいであった．（なお台風と船との関係位置は右図を参照されたい．）



写真でははっきりと分りにくいが北西から北を経て東にまで拡がっている相当厚いしゅう雨の壁がある．その上空は乱層雲（Ns）と高層雲（As）の厚い層である．東にある太陽光線が海面に反射しているところのうずを巻いたような積乱雲（Cb）型の雲は台風後面にできた低気圧性の小さなじょう乱ではないかと思われる．

この写真から多少なりとも台風の場合の雲の状態が今後の研究，調査等の参考ともなれば幸いである．